

中日理論言語学研究会 (2011 年 3 月 27 日)

日本語の属性叙述と提題構文

益岡隆志 (神戸市外国語大学、国立国語研究所客員)

キーワード: 名詞文、カテゴリー属性、主題標識、汎用形と専用形、カテゴリー属性の叙述の明示、
評価属性、属性の含意

1 はじめに

文論における基本的な問い: 文とは何か?

文は事態 (state of affairs) を叙述する (predicate) ものである

文論における重要な課題の 1 つは事態の叙述 (predication) のあり方を把握すること

叙述における 2 つの類型

「属性叙述」 (property predication) と「事象叙述」 (event predication)

属性叙述: 所与の対象が有する属性 (特性・性質) を叙述するもの

事象叙述: 特定の時空間に出現する出来事 (動的及び静的な出来事) を叙述するもの

属性叙述・事象叙述という区別は、概念的な区別にとどまるものではなく、文や構文という形式
に反映されることから、文法的に意義のある概念である

2 叙述の類型をめぐる先行研究と私見の概要

2-1 先行研究

◇佐久間 (1941)

「演述」の機能を担う文の組み立てにおける「品さだめ文」・「物語り文」という 2 つの類型

品さだめ文: 「物事の性質や状態を述べたり、判断をいいあらわしたりするという役割をあてが
われるもの」

物語り文: 「事件の成行を述べるという役目に応じるもの」

構文様式

品さだめ文: 「(何々) は (こうこう/何か) だ」

提題がかかわる

物語り文: 「(何々) が (どうか) する/した」

「時所的限定」が必要

◇三上 (1953)

佐久間の類型を「名詞文」・「動詞文」として受け継ぐ

名詞文：「事物の性質 (quality) を表す」

動詞文：「事象の経過 (process) を表す」

名詞文・動詞文の種類の違いが提題のあり方に深く関係

名詞文：「主題 (全体ハ) 解説 (部分 (部面) ガシカジカ)」という構文様式により包摂判断を表す

「名詞文の主題はいわば自己中心的な無格の主体であって、それぞれの性質を持った部分や部面がそれへ帰属し、内属するというおもむきがある」

動詞文：提題が関与しない無題文の構文様式を取る

「動詞文中の動詞文、いわば単純報告体ともいうべきセンテンスは提示の「ハ」なしに成立する。」

◇川端 (1976、2004)

文を判断に対応するものと見る

「形容詞文」と「動詞文」という類型

形容詞文：判断 (判断の構造) に直接対応するもの

主語と述語の二項からなる (主語は第一義的には形容詞文における概念)

動詞文：時間と空間 (第一義的には時間) を原理として個別化されたもの

述語の部分に「相 (ヴォイス)」・「態 (アスペクト)」・「時制 (テンス)」が分化する
形容詞文の主語に対応するものとして格が成立する

形容詞文と動詞文のあいだに、動詞文の背後に形容詞文があるという関係性を認定

2-2 2つの種類の概要

◇事象叙述

特定の時空間に出現する出来事を叙述するもの

⇒事象叙述構文の要は出来事のタイプを表す述語であり、その中心は動詞である

(1) 子供がにっこり笑った。

事象叙述構文は主要部 (head) と従属部 (dependant) で構成される

主要部は構文の要となる述語、従属部は補足語 (項) と修飾語 (付加語)

特定の時空間に出現する事象

時空間性 (とりわけ時間性) の関与

テンスとアスペクトのカテゴリー

補足語

述語との関係を表示する格のカテゴリー

補足語と述語がどのような関係を結ぶかという点に関係してヴォイスが関与

事象叙述構文の研究

格・ヴォイス・アスペクト・テンスなど多くの文法カテゴリーの関与による研究の推進

◇属性叙述

所与の対象が有する属性（特性・性質）を叙述するもの

(2) 日本は山国である。

対象と属性のあいだの相互依存の関係

⇒属性叙述構文は対象を表す部分と属性を表す部分の2つの部分で構成される

文のレベル

2つの部分の相互依存的な結合関係を反映する

(3) [主題（対象表示部分）＋解説（属性表示部分）]

主題提示（提題）の構文様式を取る

事象叙述述語の属性叙述化

本来的に事象叙述を表す述語（動詞）が一定の条件のもとで対象の属性を表す

(4) 子供はよく笑う（ものだ）。

2-3 本発表の目標

事象叙述の研究が多くの成果を収めているのに対して属性叙述の研究は、その重要性にもかかわらず、進展が不十分である。そこで本発表では、叙述の種類のなかの属性叙述に焦点を当て、上で述べた点をさらに掘り下げて考えてみたい。

日本語から属性叙述の問題に接近しようとするとき、提題構文における主題標識の現れ方に着目することが重要である。主題卓越言語である日本語には、汎用的な主題標識「ハ」の他に専用的（有標的）な主題標識があるが、そのなかの「トイウノハ」・「ッテ」（トイウ系）や「トキタラ」・「ッタラ」（タラ系）は属性叙述に特化した主題標識として機能する。以下、この点を明らかにしたい。

3 主題標識の汎用形と専用形

主題構文：[[主題] [解説]]

日本語は主題部分で多様な主題標識が展開する（日本語記述文法研究会編（2009））

汎用形と専用形

汎用的主題標識：主題の一般的な意味を広範に表す標識

ハ

専用的主題標識：主題の限定された意味を表す有標的な標識

ナラ、ニツイテイエバ、トイエバ、トイウノハ、ツテ、トキタラ、ツタラなど

その多くは機能複合語 (cf. 複合辞 (藤田・山崎編 (2006)、田中 (2010))

機能複合語のなかに属性叙述に特化した主題標識が含まれる

トイウノハ・ツテ (トイウ系)、トキタラ・ツタラ (タラ系)

4 トイウ系とカテゴリー属性の叙述の明示

4-1 「XトイウNハ構文」

カテゴリー属性

[XハYダ] (名詞述語構文)

(5) 日本は島国だ。

(6) ウディ・ガスリーは社会的弱者のために生涯を捧げた人だ。(村上春樹「意味がなければスイングはない」)

カテゴリー属性の叙述を明示する「XトイウNハ構文」

構文：[XトイウNハY(トイウNダ)]

XトイウN：Xに対してNというカテゴリーを付与

(7) 遊牧という文明 (だれでもそのシステムを身につければ参加できるという意味で、文化というより文明であろう) に必要な物や事を遺し、... (司馬遼太郎「歴史の舞台」)

Xがどのようなカテゴリーであるかを述べる構文

XトイウNハ構文の事例

◇「という人は」

(8) スウィフトという人は英本国に失望し、母国の宗教抗争にも絶望した人である。(司馬遼太郎「アメリカ素描」)

(9) 宮本先生という人は、今まで永いあいだ、もっとも広く日本の隅々の、だれも行かないような土地ばかりを、あるきまわっていた旅人であった。(柳田國男「旅と文章と人生」)

◇「という作家は」

(10) 安部公房という作家は、日本で最も世界的な作家でした。(＊大江健三郎「あいまいな日本の私」)

(11) 黒岩重吾という作家は、さまざまな要素から成る複合体だといっているが、もとより

それは個々に切り離されて存在しているわけではない。（*郷原宏「夜の光芒」）
（注：例文の後ろの括弧内にある「*」の符号は、その例文が『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ（2009年度版）（国立国語研究所）から採ったものであることを示す。）

◇「というところは」

- (12) 東京というところは、いふなればそういうインテリばかりが住んでいるところでしょう。ですから、買収金さえ折り合えば、むしろ東京のほうが地上げはやりやすいんじゃないかずっと思ってたんですよ。（*海老沢泰久「愚か者の舟」）
- (13) 裁判所というところは、普通の市民にとっては気の重いところですから、ここに来るはめになったことで、皆自分たちは不幸だと思っています。（*浅井和子・金山宣夫・草野芳郎「和解技術論」）

◇「という国は」

- (14) アメリカという国は、常に“身体”を失わないという意味で、世界で最も健全な国だといえる。（*西野皓三「“気”知的身体の創造」）
- (15) スイスという国は観光資源に相当大きく依存しているが、…。 （*黒澤丈夫「わが道これを貫く」）

◇「というものは」

- (16) 裁判というものは言葉に始まって言葉に終わるものだ。（朝日新聞2010・11・2）
- (17) もともと、正書法というものは、この対応関係を確立するための約束なのである。（*梅棹忠夫「梅棹忠夫著作集」）

4-2 カテゴリー属性の叙述を明示する主題標識「トイウノハ」

[XトイウNハY(トイウNダ)] ⇒ [XトイウノハY(ノダ)]

主題の部分でXの具体的なカテゴリーを問題にすることなくXのカテゴリー属性を表す形式「トイウノハ」はカテゴリー属性の叙述に特化した主題標識

Xトイウノハ構文の事例

- (18) 幸子というのは、いい加減で、めちゃくちゃな女だが、嘘をつくことはあまりない。（*赤川次郎「探偵物語」）
- (19) 須田国太郎というのは、本質を洞察し、いったん本質を見ぬいてしまえばゆるがないという人物であることがわかる。（司馬遼太郎「微光のなかの宇宙」）
- (20) 天才というのは往々にして短気でせっかちで短命なものだが、…。 （和田誠・村上春樹「ポートレート・イン・ジャズ」）
- (21) 男というのは、あなたが思っている以上に、誉められ慣れていないのです。（*ゆうき

ゆう 「「ひと言」で相手の心をつかむ恋愛術」)

- (22) このころのロシア人というのは、いまのロシア人たちとちょっとちがいます。(司馬遼太郎 『菜の花の沖』について)
- (23) ヨーロッパというのは、日本のように、何チャンネルものテレビ放送があるわけではないし、その数少ないチャンネルも夜になれば休憩タイムに入ってしまう。(佐渡裕「僕はいかにして指揮者になったのか」)
- (24) 母校というのは、不思議な魅力を持っているものだ。(大町陽一郎「楽譜の余白にちょっと」)
- (25) つくづく外交というのは難しいものだ。(朝日新聞 2010/11/13)
- (26) オリンピックというのはだいたい退屈なものですし、…。(村上春樹「シドニー」)
- (27) 知遇を受ける間柄になったのは、室生犀星晩年のほぼ十年間だったことがその一節から知れる。室生犀星の側からすれば、福永さんは最後の文学的知己だったのかもしれない。そして十年間というのは、文学的な敬愛を深め熟させるのに、決して短かすぎる歳月ではあるまい。(菅野昭正「ふたたび、小説家の批評」)

4-3 Xトイウノハ・XトイウNハの指示対象

「幸子は」の指示性と「幸子というのは」・「幸子という人は」の指示性の違い

Carlson (1977)、Carlson and Pelletier (1995)

個体のレベル (individual-level entity) vs. 現れのレベル (stage-level entity)

「幸子は」：個体のレベル・現れのレベルの両方を指せる

「幸子というのは」・「幸子という人は」：個体のレベルのみを指す

- (28) 幸子は実によく働く人だ。
- (29) 幸子はつい先ほど家を出た。
- (30) 幸子というのは実によく働く人だ。
- (31) *幸子というのはつい先ほど家を出た。
- (32) 幸子という人は実によく働く人だ。
- (33) *幸子という人はつい先ほど家を出た。

cf. 「XトイウNガ」：現れのレベルの叙述が可能（「XトイウN」の引用用法）

- (34) 孝子という人が来た。

5 タラ系と評価属性の叙述

5-1 評価属性を叙述する構文

構文：[対象X+評価属性（あきれた/困った/たいした/... N）]

経験に基づく評価

5-2 評価属性の叙述に特化した主題標識「トキタラ」

「XトキタラY」という構文

経験に基づく評価（人物評価）：「きたら」という形式（藤田（2000）、岩男（2009））

トキタラは属性叙述に特化した主題標識

- (35) 妹はしっかりしていて手がかからないんだけど、このお兄ちゃんときたらだらしがなくて…。(*親野智可等「親力で決まる！子供を伸ばすために親にできること」)
- (36) 世のなかの人びとときたら、どいつもこいつも名利の徒ばかりで、生命をたつとぶ者など、ただのひとりもいないのです。(*中野美代子「西遊記」)
- (37) 四十余年前の夏目八十郎ときたら、辻道場の下男や女中が、「仁王さま」と、よんでいたほどの、堂々たる偉丈夫であった。(藤田（2000）)
- (38) そう思い返しているのに、ヴィヨンときたらけんけん吠え続けるのだ。(佐藤賢一「二人のガスコン」)
- (39) 若旦那さまは槍持って家の回りを走りまわると、若奥様ときたら部屋にこもってわんわん泣いているしでな。(坂東真砂子「山姥」)
- (40) 正浩ときたら、外車や自家用車まで持っているんだ。(藤田（2000）)

5-3 評価属性の含意

評価

評価内容と証拠

述部

評価内容を表現する場合と証拠（経験（事象））を表現する場合

(cf. 唐沢・菅（2008）、Fernald（2000）)

評価属性を直接表す叙述と評価の根拠を表す叙述（⇒評価属性を含意する叙述）

◇評価属性を直接表す叙述

- (35) 妹はしっかりしていて手がかからないんだけど、このお兄ちゃんときたらだらしがなくて…。(*親野智可等「親力で決まる！子供を伸ばすために親にできること」)
- (36) 世のなかの人びとときたら、どいつもこいつも名利の徒ばかりで、生命をたつとぶ者など、ただのひとりもいないのです。(*中野美代子「西遊記」)
- (37) 四十余年前の夏目八十郎ときたら、辻道場の下男や女中が、「仁王さま」と、よんで

いたほどの、堂々たる偉丈夫であった。(藤田 (2000))

◇評価属性を含意する叙述

(38) そう思い返しているのに、ヴィヨンときたらけんけん吠え続けるのだ。(※佐藤賢一「二人のガスコン」)

(39) 若旦那さまは槍持って家の回りを走りまわるし、若奥様ときたら部屋にこもってわんわん泣いているしでな。(※坂東眞砂子「山姥」)

(40) 正浩ときたら、外車や自家用車まで持っているんだ。(藤田 (2000))

評価属性の含意

益岡 (2004、2008a、2008b) : 事象叙述の属性叙述化

語用論的推論

文法論と語用論の接点

6 おわりに

結論

◇日本語から属性叙述の問題に接近しようとするとき、主題卓越型である日本語に特徴的な主題標識の現れ方に着目するのが有効である。

◇日本語には汎用的な主題標識に加え、主として複合により形成される専用的・有標的な主題標識が存在し、後者のなかに属性叙述に特化した主題標識が存在する。

◇トイウ系の主題標識はカテゴリー属性の叙述を明示する働きを持つ。

◇タラ系の主題標識は評価属性を表す働きを持つ。その叙述においては評価属性を含意する場合がある。

参考文献

岩男考哲 (2008) 「「って」堤題文の表す属性と使用の広がり」益岡隆志編『叙述類型論』くろしお出版。

岩男考哲 (2009) 「「ときたら」文をめぐる一有標の堤題文が意味すること一」『日本語文法』9巻2号、日本語文法学会。

影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136号。

唐沢穰・菅さやか (2008) 「対人認知の心理過程と言語表現」益岡隆志編『叙述類型論』くろしお出版。

川端善明 (1976) 「用言」『講座日本語第6巻：文法Ⅰ』岩波書店。

川端善明 (2004) 「文法と意味」尾上圭介編『朝倉日本語講座第6巻：文法Ⅱ』朝倉書店。

佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』育英書院。

- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」 仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版.
- 田窪行則 (2002) 「談話における名詞の使用」『日本語の文法第4巻：複文と談話』岩波書店.
- 田野村忠温 (2008) 「複合辞の本性について—その構成と単位性—」 児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『主題・取り立て』くろしお出版.
- 丹羽哲也 (1994) 「主題提示の「って」と引用」『人文研究』46巻、大阪市立大学文学部.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院.
- 藤田保幸・山崎誠編 (2006) 『複合辞研究の現在』和泉書院.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」 益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008a) 「叙述類型論に向けて」『叙述類型論』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008b) 「日本語における叙述の類型—中間報告として—」『エネルギー』33号、ドイツ文法理論研究会.
- 益岡隆志 (近刊) 「Nノコトダカラ構文の意味分析」『事象タイプの記述研究』くろしお出版.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (くろしお出版復刊、1972).
- 三上章 (1959) 『構文の研究』東洋大学博士論文 (くろしお出版から2002年に刊行).
- 三上章 (1963) 『日本語の論理』くろしお出版.
- 森重敏 (1965) 『日本文法—主語と述語—』武蔵野書院.
- Carlson, G. N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts.
- Carlson, G. N. and F. J. Pelletier (1995) *The Generic Book*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Fernald, T. B. (2000) *Predicates and Temporal Arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- Kageyama, T. (2006) "Property description as a voice phenomenon." Tsunoda, T. and T. Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations*. Amsterdam: John Benjamins.
- Ladusaw, W. (2000) "Thetic, categorial, stage and individual, weak and strong." Horn, L. and Y. Kato (eds.) *Negation and Polarity*. Oxford: Oxford University Press.
- Li, N. C. and S. A. Thompson (1976) "Subject and topic: a new typology of language." Li, N. C. (eds.) *Subject and Topic*. New York: Academic Press.
- Shirai, K. (1986) "Japanese noun phrases and particles *wa* and *ga*." Groenendijk, J. et al. (eds.) *Foundations of Pragmatics and Lexical Semantics*. Dordrecht: Foris Publications.